

学校だより

NO. 86

H28. 3. 8(火)

# あけの

学校教育目標

心身ともに健康で、個性豊かな  
実践力のある子どもの育成

**めざす子ども像** 「かしこく」 様々なことに興味・関心を持ち、自ら学び、考え、正しく判断し行動できる子

「心豊かに」 自分を大切にするとともに、友だちなど自分以外の人も大切に思い、つながりあって行動する子

「たくましく」 健康や体力の向上維持に努め、めあてに向かって粘り強くやりぬく子

**めざす学校像** 子どもが喜んで通う学校、子どもがつながりあって活動する学校、子どもに確かな学力が身につく学校

ホームページ <http://www.ise-mie.ed.jp/~akeno-e/>

編集・発行 校長 中村幸博

## 6年生へ・・・、そして6年生から・・・！

3/2(水) 5限目。学級閉鎖のため一週間延期をした「6年生を送る会」「6年生音楽発表」を実施しました。送る会では楽しく、盛り上がり、6年生の音楽発表では6年生のしっかりと構築された合奏と美しいハーモニーが体育館に響きました。

### 6年生を送る会・・・

### 5年生力強く！



体育館の各通学団別のように(右)

5年生の実行委員とクイズやパフォーマンスをするメンバーが進行と会場全体の盛り上げを全力でしてくれました。5年生全体が6年生からバトンをしっかりと受け取る、明野小を引き継ぐんだという「強い」意思、「がんばっていくぞ」という前向きの姿勢を見せてくれました。約25分間の送る会のいたる所に、それらが感じられ、頼もしく思いました。

よくやったね、5年生！



送る会は1～5年生まで年間お世話になった「通学団」別チームで行われました。

実行委員長・遥奈さんのあいさつ(写真左)で始まり、○×クイズ(学校編)、パフォーマンスでのクイズ(芸能編)、爆弾ゲーム、そして最後に列ごとに一列で前後や左右に動きを入れたリズム体操・・・とアイデア満載の時間でした。

いつもは通学団の先頭に並ぶ6年生も、今日は招待される側。先頭には5年生が立ち、6年生は各列の後ろから、のんびりと、そして、ゲームや動きを楽しんでいました。最後は、5年生が手作りした『明野小学校校舎の画像の入ったペンダント』のプレゼントを首からかけてもらい、約560名がよい時間を過ごしました。

ありがとう、5年生と1～4年生。そして、今まで、この一年間ありがとう、6年生、です。



○×、パフォーマンス(平野先生も入り)、列のダンスチームの各写真です。

## 6年生からの 最後のメッセージ!

14:10～は、6年生が1～5年生に送る最後のメッセージとして、音楽発表が行われました。

曲目は、合奏『栄光の架け橋』、合唱は『あすという日が』です。

6年生でも日々小さいざこざや、何気ない一言や行動での傷つき・葛藤 『栄光への架け橋』演奏中の6年生と見守る保護者・下級生(上)は多々あります。その度に納得するまで話し合い、新たな一步を踏み出してきました。

6年生一人一人の成長もこの一年すばらしかったですが、学年として、行事・学習・学校生活に「粘り強く、一所懸命」取り組む姿は何よりも下級生の範となってきました。この「粘り強さと一所懸命さ(難しい言葉でいうと真摯(しんし)さ)」は、これから6年生一人一人が生きていく上での宝物になると思います。なかなか身につけることができない気持ち・姿勢を、6年生のほぼ全員は持ち合わせています。ぜひ、自信をもって、卒業に、中学校生活に向かっていってほしいと思っています。

6年生が選んだ『栄光の架け橋』も『あすという日が』も、前向きに生きよう、今を大切にしよう、明日や未来を信じよう、というメッセージが表されています。『あすという日が』の歌詞にも、おぞらのみをあげてごらん あのだをみあげてごらん あおぞらにてをのぼす ほそいえだ  
おおきなきのみをささえてる いまいきていること いっしょうけんめいいきること  
なんて なんて すばらしい あすというひがあるかぎり しあわせをしんじて……(以下略)とあります。



合唱する6年生(左)



小学校生活も、今のメンバーでの学年・学級での生活も残り10日間になってきました。落ち着き、しっかりとした6年生の学校生活をそのまま、1～5年生に示し、晴れやかに卒業を迎えて下さい。

保護者、お家のみなさん、一週間延期とさせていただきましたが、多忙な中、小学校最後の演奏・合唱を聞きに、70余名もの参観をいただき、本当にありがとうございました。

1～5年生が作る花道を退場する6年生(ここは5年生のところ)

<編集後記> まもなく、東日本大震災から満5年を迎えます。明野小に在籍する子どもたちは、当時は、まだ1～6歳の子でした。しかし、震災の怖さ、そこからがんばってきている人々をできる限り知る、意識する責任はあると私は思います、大人が知らせるべきことですよ。

